外邦太平記

三

へ13
3493
3

門へ13
號 3493
卷 3

東京帝國大學圖書之印

外邦太平記巻之三

孔平漢呉陳友が戈船を初る事

作く孔平漢らをやゝ呉陳友をいふ武者と云るふ又は潮別ふ在て觀察の官たり日付のゝ呉遁丈が一男なり呉公丈子世ゝて一子陳友が初雄しして孤子と成延陵ふ住しゝが人と成ふ語ひ智恵諸人ふ侍る兵法ふ通じ乾坤古しへ比陳平が才能を慕ひ之を真似を極めたりあられども氏人ふ癖を酒を好く数枠を呑とも年とせば兵書奇保ふ心を至しゝ家業ちひふ深そる故経に家を考ひ人々

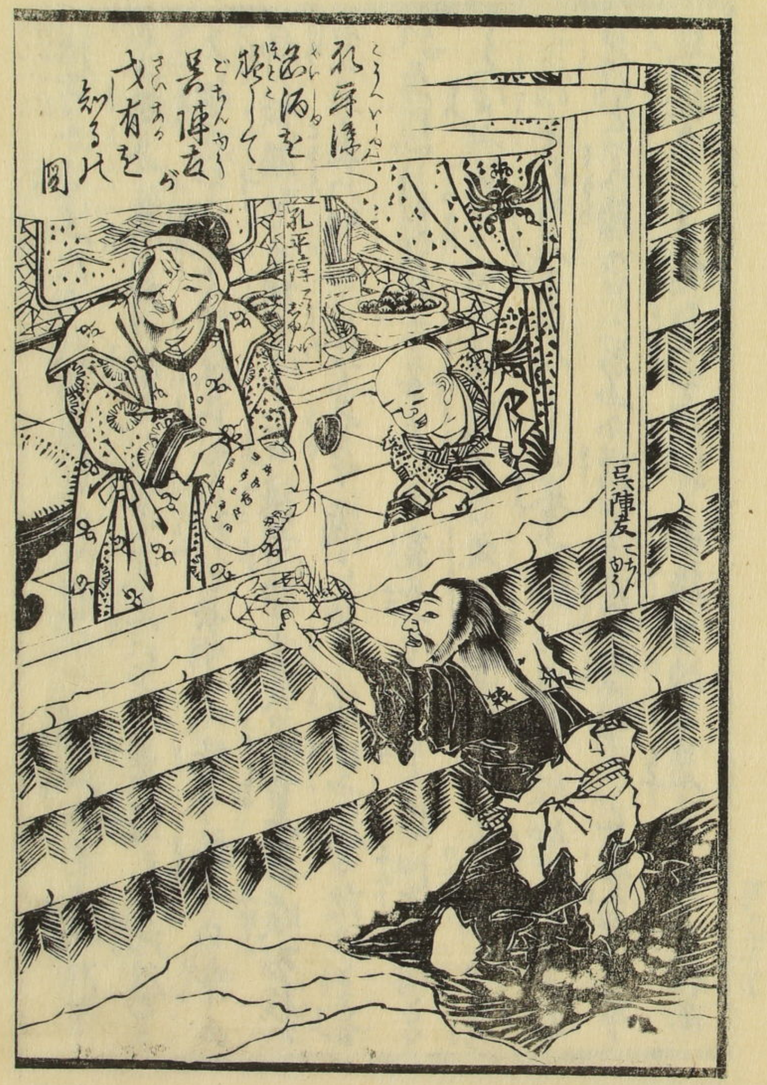
早稲田大學圖書
昭28.9.11
藏書

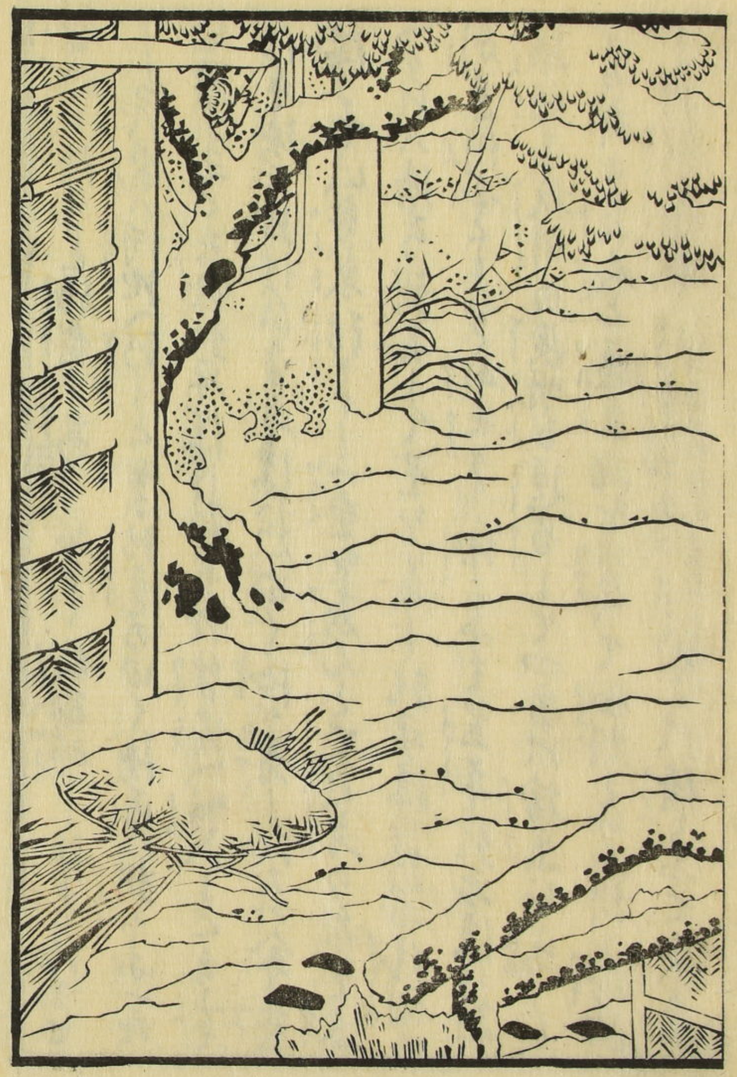
備れて毎日を暮してふ拾て呉侯友人思ひ名ふれ
く崇ぶれて八月を乗るに御あ〜をる月こそ幸ひ富幸
と成て別く〜流り山川の險阻路徑比喜を皆足繁〜て
猿中小消あんと思ひ出呉陳友人い孫ふ出て人是と称
徳方を思ふ久〜主侯い元丐と称所〜の新下ふたつ
沈蓮陳友ハ家祝大丈夫て杖をもつて扶ふ云こと
あ〜人有て疲れて巻ふの〜彼れる衣を着〜雲風ふむひ
さむ〜と世沒宣猿ふれを識〜る名あ〜俗ふ孫牙ありと人
異名〜て孫丐といふ拙まく孔辛陳ふ言伍ふ世〜ざ
る附智表文戈人ふ表で主家性俗ふ〜びよつて辛陳

ハ何辛苦の豪傑ふ遊び志〜を治び天下ふ名聞い
さんと考ふ思ふる久し志ふる孔辛陳武年の孫りの
孫主人酒をきつし所ふる時と〜て言葉〜大言と
ふり頻りふ降つるに辛陳ハ高文を悦び獨り愛せ
んも本高〜と門ふ出で四方を孫ふる時ハ嘆さ〜孫
ハ孫丐宣我除て行り孔辛陳よく〜見れば
色丐ふれども世の色吟と い拙殺の遊び是必走凡人
に非ずと思ひ別ちまわを使ふて家ふ入居て曰く此ハ
人の嘆さを孫丐といふハ油ふるや否彼者孫り孫丐
ふりと言ふ孔辛陳曰く酒を好や孫丐能飲ひと

衰倦て孔平仲に侍宴ふの付大第ふ酒を酌て李
〜ふ蘇丙脱ひ名ち除こをせり孔平仲詩び是
でそ我ものぞ　是り此とて至ねて酒を嬉めさせ蘇丙ふ約
して曰く他ハ至大業ふて除へ〜我ハ代庖ふて除んとさろ
もりをあ〜とり彼蘇丙大上戸ふて三十余杯除られども
更ふ辞乗文もあきに孔平仲ハ大辞して強ふ進へ
ろ〜酒れ代を依て代意等孔平仲を着ふけふ
いて真〜入此蘇丙ハ酒を除へ至〜代意等弥謝して
又形下ふ切り至病を吃しる弥ふ孔平仲熟辞
して那〜とれハ最後を知ずは是朝貝光〜ふ侍の着ふ

官昨日蘇丙と酒宴す甚く失〜我辞邪〜蘇丙怒る
〜ちび染ハ何地へ行と云ふ代意の曰く蘇丙ハ新ふ小一疑
を以〜赤ぐ去び孔平仲に是状実〜ふ入ると云
代意蘇丙我律ひる平仲ハ曰く他ふ着〜たるハ余り薩
漢ふて代意乗防ぐ〜一重を表んとて自分の衣を与
へれば蘇丙弱表して是を着〜孔平仲ふ弥謝〜
別是何ふも赤ぐ去り代るふを笠年孔平仲ふ弥謝〜
張行〜杭州の長明ち返為して四方代傷糸を生〜
名武日友人と連立酒を携へて西湖と云へ所ふ招び
〜附放鶴亭是ハ往古林和靖ふ放ちる鶴ふて名付〜樹へ代傷ふて又うの


孔平仲
酒を
飲して
呉陳友が
戈有を
切る図
呉陳友



陶氏に遇ふたりれ孔平淳于髡は悦びて呼止めて来れとて
ろふ共に連立たる酒店にハ非ず又先れども益儲ありしかば
先生の宅を辞して陶氏を伴ひ長明寺へ帰り扨く其の
席破服を如何せしと問ふ陶氏曰く是ハ夜来に寒ふ暖められ
夏衣れハいらぬと依て売て酒と為し夜中ふ酒めたりと言ふ
孔平淳于髡ハ無かぎりなき言葉を面白く思召し書信るる
やと問ふ陶氏曰く我儕くの衣儘て帰めにと言ふしく出
で倦ず陶氏人と為りと誉ふ孔平淳于髡此中ふ常人ふ
らばとるん此中是思ふ豪傑なりと思し早
速湯あしさせ髪を結せ衣服を改め着させ其性

来暦を問ふに陶氏の曰く儂れ姓ハ呉ど名ハ陶友と言ひ
ふし漢の陶平さんが才能を慕ひ粗楽を為す似る依って
世の人陶平が友と言ひより自ら陶友と名付たり
代く延陵の地ふ在りしが数杯の酒を好き工長書ふ心を
し後ふ家産を傾け不く流浪して当ふ来り熟く思
ゐるふ当の者ら晒ふされハ人を
ましてや儂が如き者ふとると知るふたるべし
明ふ眼力有て儂れを馬人の中より見出しを上ふまで
衣服を賜ハり誠ふ大恩去れ上なし儂彼の淮陰のお年
にハあらねども古へ韓信丈夫たりしとき淮陰の老婆に一飯を
もひのちに漂の天下を定めるをいふあり

以一族の恩を忘るゝあるべからず孔平仲大に
悅び座を立て呉陣友が手を執て曰く呉先生を
後ふ海内に豪傑の我ハ唯酒友なりとおもひ給ふ足下を
見損ひたりと称賞し乎偽をやとひ利益春と云酒を一瓶
買来り人日夜酒宴し悅ひ楽むを数日を経て孔平仲
陣所に酒食を多く送て陣友を敬て遇せ給ふ
孔平仲陣所に宝刀に紙巻れ紙巻へ切りしが文紙巻れ大家の
義を有者なれ帝ふれ高附の立義
を張呉陣友が心を延請ふ者て文武の師とあり中
教たして安撫ふ紀伏す呉皆孔平仲の恩深

と打喜孔平仲の在鎖へ来り問候を尽ひ
ぬ号又孔平仲陣所へ陣友が義を重義を知る孔
平仲元曄に退治元帥と帝へ奏聞い
たし号者 俗り有そ より小童へ石碑出せ
孔平仲言馬後の手解を後年

新て孔平仲と元曄に退治と呉陣友
を石碑を新呉陣友へ和書及び孔平仲
陣所へ招き孔子迷用意して小童へ来りて孔平仲
に小見へ日れ び ちひ小脱び 注事を 祝ー 生日へ 鎖

小曽あて酒宴を催し歩ひ楽〻たり孔平原
が曰く此度呉出生を乞ふに余は笑ふ雖も
元帥李白玉りを南京に城を立て城使
強威をふるひ民を悩ま依て別くれ備物をせ
而て幾ばくか利あくして後す是等家の数ふあるべき
なり李白玉りを妖術をもて備民を惑ふ又
法武統ひ能兵をつらひ謀略多く是を斬て
情を訪るも此先生なで小有と云ふ故に依て帝
小参内して乞ふ所あり孔平原先生玉民の為ふ
牛脂を於て城を退治し呉陽友が曰く

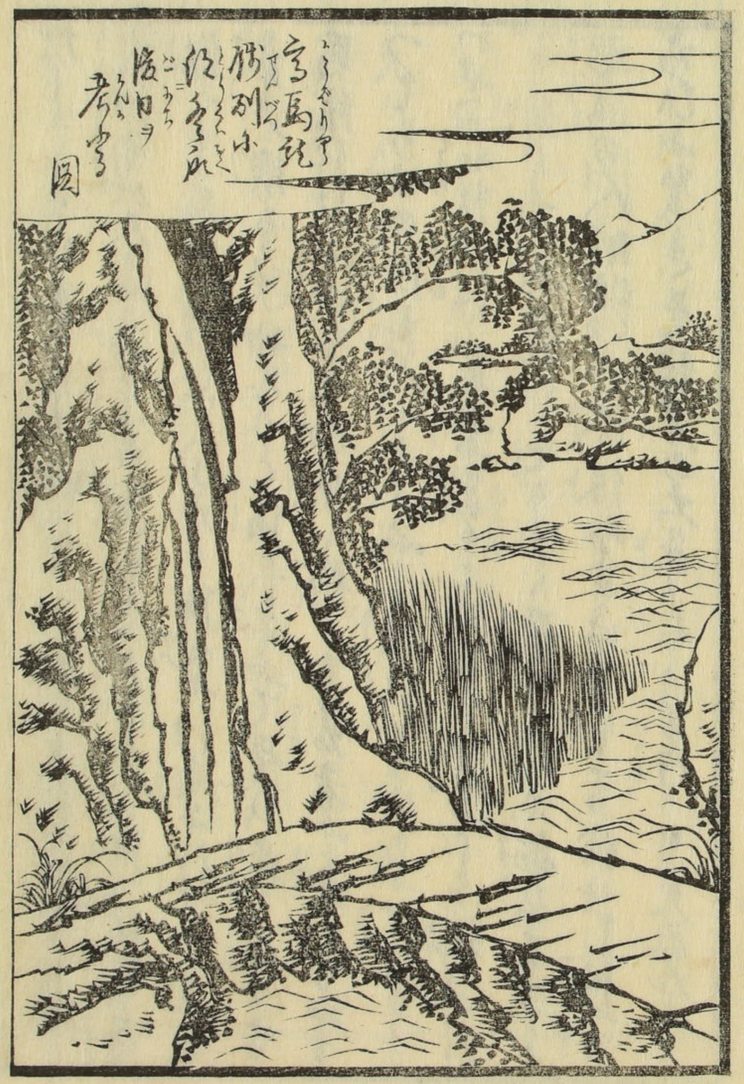
南京の城兵逆賊を懲し民を敬くといふ乎粗等り我を小楽
等ぶ参内を悪む天子の詔りあるべき小ふ人ぶ為ふ帝
勅命といひ恩人ぶ云ふ系統張良孔明等有
及びなくとも城兵小考らんや況や勅命を背る天子の
綸命を首小教ふ兵一敗小去擢んと曰孔平原
欽歩して皇朝小呉陽友を使ひ帝闕小乞り天敬
を祈さ〻めんと乞るふ天子此御不審く思ひ後主有
乞らんとする時寧武曲れり来りて曰く帝ふひふ逆鱗
有せられ孔平原を敬り呉陽友をとり
ぶ楽い一版ふせ多り 主芳市中の民ふ怪乞世人他名

して徒丘といふ人を活さしめ者いを備物備幸比元帥
とおさんと思ひも孝こゞ帝閥ふ入る事なきと比和金之
つゝ連て陥れよと言ふ寧武曲已れが言ふ事ひら
さざるを憤り后宦劉瑾ふ付て讒奏せし故なり
孔平原仲中岩り比曲者侯兵をいて帝を迷惑大
羅人切て捨んと思ひしが大子比おの小事なりと文にも
出さゞして曰く我出を辛ず天神も照覧あ辛で偽
りを奏耳せんいふも呉係友ごちんい字を徒丘と云り去
られを六藝ふ百ど兵書れ律め天文地理ふくゝ一変に天め
ぶ下の英雄く昔へ漢轉信ちんの老婆ふ一飯を乞あるひい

胯を潜りゝ辛文おれども漢王扮ひて項羽比大敵なや
ぶり四百年比基業を冥ゝり陸友ちんい肝ふ立丘人ふれた
絨將元帥ふを彼る戈有是法人の及ぶ所ふあゝ然く
で世ふ是を恭せゝ寧武曲ねいぶ曰く相国いう程曰ふとも
倫余又いふとも事を然ゝ今日ハ退出ゝ孔平原
帝の逆鱗を解ふへと列ち孔平原しかんい呉陸友ごちんを
もおいの鎖ゝ寧武曲ねいぶが云事を信る呉陣友ごちん
比曰く月明らかれで深雲是を隠ゝ又然これを拂ハんや
いまゝ元帥ふ延法の附ふ乗ちゝと文にうゝむるけしき

もおく酒を呑てゞ楽しゝる是が孔子漆雕開の病ひと
号して朝に夕ず寧武曲ハ寒ふ悦びおの〳〵主人知己
して政ごを斗ひ名流るゝ孔子漆雕開ハ呉陣友ども
戈を纂ふゝ〳〵ふ鎗ふ止まて登義一法く戎日陣友ふ
もろひ曰く識徒退法は附ふゝ先生ゝ謀ごを立て
是を彼り倩を切るや呉陣友どもの曰く史敬を斗る
ハ機ふ位ひ憂ふ意ゞ謀事ハ主内ふあり人を知り己を
知る附ハ嶽ふて倩ずといふ事あり孔子漆雕開の曰く
己れを知るハ長られども人を知るゝ細し先生いふて
知るや呉陣友のごとん曰く人一大半く倩彼必ずひとを

知るふ友と前後を見早ふ者をもてあ機を彼るに多き
を人ふ名ふ者ふ是人を知るあり知て郭ふ附ハ元嘩
李白玉りく号生捕り年間去る日を五さ沢紙
号宋代号者ふて人勿ち孤立れ知て味方の彼れとある
ゞ一去の出雲豪傑ふ去あるチんを武勢せず我斗る外ふ
老別の守倩ふ韓永戴稲りハ元嘩代後藤
に知を〳〵ゞ逆く長ふて必ず彼れん法る附ハ山縣下
城ふ強るゞ〳〵代国ふ出長者を重謀事をさゞけ
城に強るゞ者ふ老人徽くハ去代底ふ去き事を
孔子漆雕開の曰く寡に主人の忍勇の者を我と去


高馬號
勝列山
紀多庵
陸日ヲ
考之
図

高馬號

たゝさるの水魚のごとし性いさぎよく義を強りといふべし
江南に人ありて物産多きことを聞き人に誘へて遠れの嘉
僕くを馬鈴に付せしに江南に伯牙と交
章に優るの妙をもつて是を聞かしめ伯牙
馬鈴に小曲など西白く作りて美青に点へ
つまら世の流俗人もて流行せざるものの
い是を心に傾け家業をも捨て去ひ
有聞りて馬鈴をうゝ楽ろんを獨ひあること
要路の人の所望に小像張あり氏事を言ひ他人
ちひふ驚きを是伯牙の大半なりしかば先れんと南

求ゆゝたり鈴ろふれ孔子漢に小京小有 古昔言馬鈴
と同嘉の学士ありて文を作り流く
聞くゝとのれれで孔子漢を思ひ新まんと多き張
のを文殿をの作をこ嘉き小京へ孔子漢に小京
みえれば孔子漢ちひふ悦ひ出ひふ驚き新しく
言馬鈴ろ、巨弼牙のうつを流ろんとおれ先を
孔子漢に小京小学法に世ふ流行ふ小曲い是下の流く
りふゝ小て答んふ称ふ先生若推乃へ多ど書冊文を我
小嘉き盃と是ろ言馬鈴ろ京面して言葉ふを愛
ぜんどりふ潮く心を義対て同く僕を生鎖へ来りふん

を小出けるゆふて去りしのち紙り伝て生姜汁を
交粒ひを第らん為かり熟くべ良素あれ孔子陳に於る曰
是安きをなりかるく仮汁ふべ一四を比きべりしず先兼
仮を第らせんとて番入れて栗仮焦胡拍魚を添へて
拍をすくむるふ言馬弦りやいたふ兼食せきれぞ去の
仮をとてをしを取ぎるふ孔子陳に於いの曰く江南の比
い年月第味噌羞を吟せり弦を彩る兼鮨ふ是を
癸丑を如何ぞ丈丈たる者候食は美悪を論ぜ
ずず兼食ふても然能延食ふを去の英雄なを是れ
も相伴せんとてをのこべ食を伝て言馬弦

も沓方なく箸をとりて食べおかりなる孔子陳に於いい去ぞ
らく今考れもけるりかといたしを度産を立て馬入り
しが良有そご通の封じ文を持ておそ言馬弦りやふ近び
て曰く我故人某い仏世ふあり是下物汚ふ比一を我と
げんるべし必ぞ考るるかれ言馬弦りやこれを
笑ていらく弱きるく家ありて生銭を稼ぎも比ぞ比
一大るの ふあ人伝て学を言を添られ救ひうを生と郎人
る法るを文通を届けしといを去め何ふ生是ぞ
ぞ救ひうとしいども孔子陳に於る五義ふ一番ふ
ををつどを文ぞこてまぞ一ッ比仏を持

知て四く是へ世ゝ代ゝの後りあるし
うれぞ是下男をいとつゝ代ゝ持ちれとあるに依て言馬
鹿ゝゝ心中思くとして強ひ敷ひをすともるに
言ゝ代ゝ乳を怪奇ふ見物ふ路頭ふ行のふも心を安ゝ意
味あるいもく強として居るに孔子傳に思ひ有を言
言鹿ゝゝをかもうひ代ゝ所へ字き十行計りあるべし是
を古物とたふ嘉き物形ゝとゝ後ゝ佐ふ意ゝ入るふ
意言鹿ゝゝ弥く世ゝふ思ひ有りと思ひ徒で紙或取
上方物或もち孔子傳に思ひの淡ゝけを原く弥謝
して代銭を云おふ京ゝ上ゝ代ゝ所ゝ来き事

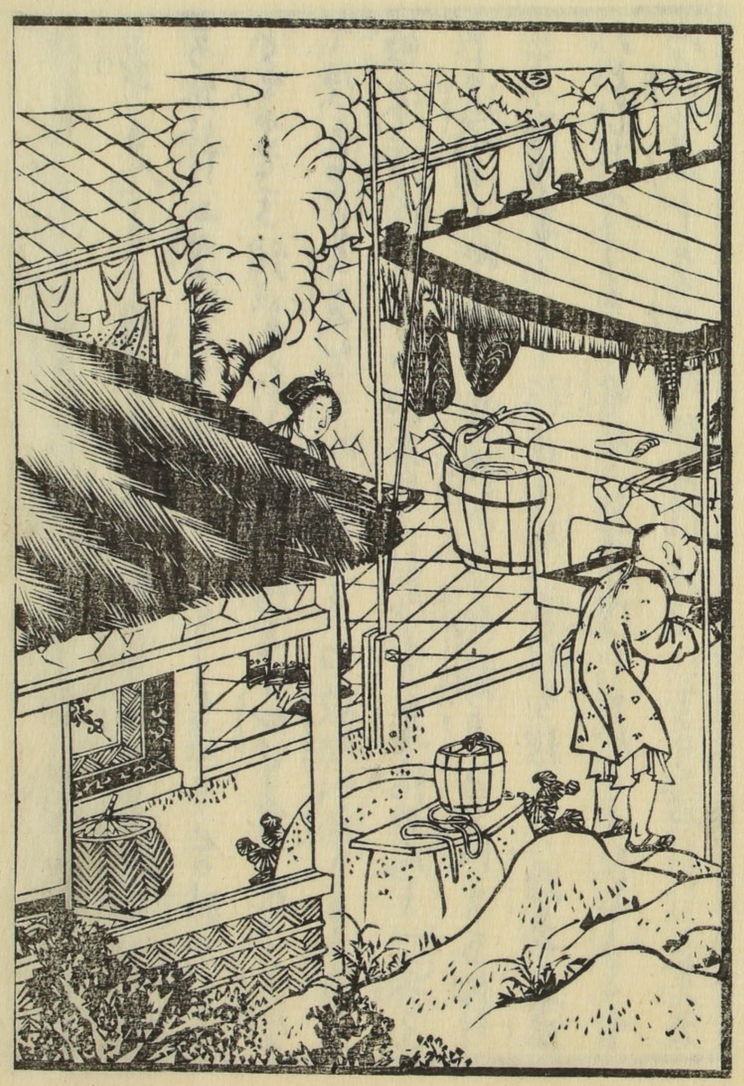
孔子傳に云ふたゝ依て言鹿ゝゝ心中ふ是を考へ
又ゝふ代ゝ所へ孔子傳に思て弥く解釈せとあるべ
しと思ふ有ゝ是ふ有ゝふ代ゝ所へふ有りとれふ
是を解せゝんとあるあれぞめ何と解へゝんと考ふ
あゝふ代ゝ所をゝくゝ有り此れ共解せゝ代ゝふ拾有処
来り石ふ徳ふ体ふ有て言鹿ゝゝ考へゝふ所をもつ
て考むハ文字ふ手ふ時ハ紙ゝをもつハとあるゝふも孔子
傳に思ひのおそ有べし代ゝ所へ冬ゝ所と云ある今これを忘
す時ハ文ゝの文字を上下ゝ有ゝ久ゝ人と云文字ゝ
下ハ上ゝと云字也又冬ゝの事ハ流り消ると例まこれ

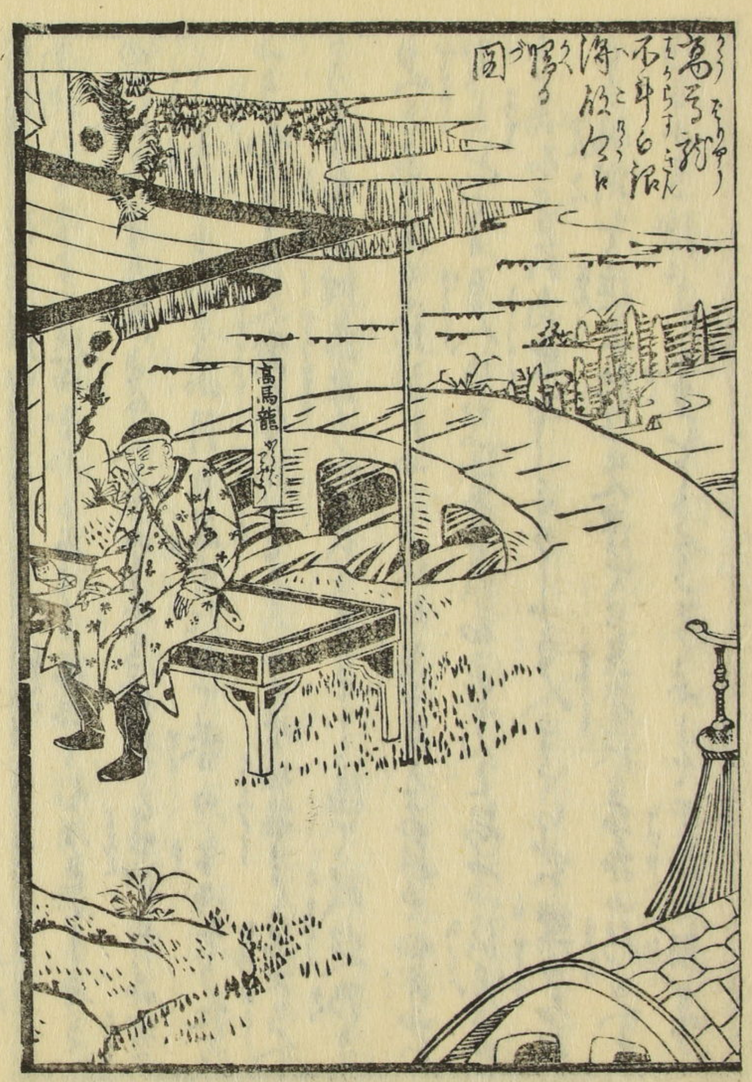
称目を納めてと云義なるべし文々と称るは
此字訓よりみると訓ぜし ひやうは氷せし ひやうの義なる冬の
水る氷ふさむかふと訓もあられは我陽中に於て冬は
寒暑る迄待居まと云義なるべし 気を持表ひ居る我は
藏之是らりぎ杯あり 様々種をやせば 葉なる熱は
陽之是一両来後は寒やして 陽冊をかさず 義気の重サ
十斤は十六数の積り也て 一ふ成す 是両氏へ移て 文数ふ
成る事を知らしむ 十斤は壹六百目之重は枚々に之る事を志
め 実はつるれくと云義ふて 心気を実くを云 六百は六は陰
数の積り也て 余く冬は寒を持一陽来後去て 故に陽是と

云事なるべし 抑も孔平澤の貴我へ与へ居後る從
して後日を示せしは 悟るべき事と物りかへして居るふ
今日も西へ傾むくに至 此紙表現立ち 陽氏さして流るる日
ある也 陽氏に至り 先一新の業居に休くも 出病より都て
定じに 彰く 出営を届けさせるに 孔平澤は 出営を治
るもの 陽冊に名高き 有徳人なりしが 出営をなす事と
至としく 主立人に馬にて 休み居る茶店へ 参ひて
空くれを知し 我家をうらしば 先生の来を頼みんたね
業上仕るなりと あるにて 宮館にて 重心功成しがたく
活に業門せく 是を家に至り 席に能 終て主人の上

はせ孫兵衛殿ハ
て言語述りをもてなしふそ言語やうも此ところ
を敬じたり生徒中々先生拙家此一ケ月ハ
ゐるとあるふ言語述りて男子帰りて拙来り
を所をそこ〳〵れぞ人此所先生ふも何とおもひ
ぞとあるふ言語述ハ天敬ず初〳〵と解〳〵たりと張ふ
をじを学を学ハ長崎ハを人ハ為て先生の言葉も
を他〳〵く也文章ハ無比敬ハく〳〵て天下此人を知
付ふちぶんを張り今四月ハ人来る事上も
ちを書ひふして陳ふ天より此奇縁を結ひ

蔵地ハ生ふ遠ふ西地もあく孫時もあるとどもあく
の内いとまり居ふ人とあるふ言語述ハ喜びくふ驚
く思りあるふ月日早くたちて春の来ふるりたる
ふ人中ハ人ハ変見書変ところふを山者く見ふ人
りあるふ時長者りたる此ハ止めぐ〳〵伝て敬ふ乃り
ふとあるふ言語述りふ和ふ世ふ〳〵あれぞ山ふ世ふ
驚を上ぐる人のいふ者ふひ和ふ世ふ後和ふの
ふ高ふ〳〵ふ高書ふ〳〵〳〵ぐふ人まく〳〵ハ世少ふれ
とも懐別を進上伝る先ふて此ふ奇此ふ事和ふ伝ふ人と
りるふ言述り〳〵ふ多を〳〵〳〵ふ〳〵て至敬を解せず




高馬龍

汝ら十二人小京兆その〻別して戸部の兼尚書官に
萬て二人より中府にて使のもの白銀三百両持参して高
麗館に逆ひ尋ねくれども送りける懐刑あり
とらせて高麗館をかろうと偶ども出ずよう文綱に
て使とまうし宴を立て日をかさね彼ら帰りおほ
彼後琳のかたれ孔聖にて人より〻後の人〻一丈に
中途にかへりて穏役しける所静り宿後高麗館に
帰り帰りけるゞ行るもあけるが高麗館に婚をて安堵
比比ひれなりしまり驚き孔聖はにいん計りしひかりとさ
大暴を感じける元来孔聖は高麗館とりける事

をまかせられ日本高馬館の余りにてを取りし名なお
けしるを成しかんとて緒と兼里にまてなし彼は彼の有
徳人は身を借りて彼を助け雑事をも人物を尽まくは
罷るは是業家は仕業にて人は計りまさる所なく
は千高後高馬館の人は進みよりて光州府に
参て仕度なし高時守備の韓永が詔を迎とりて勤め
居る所を臣と孔聖は後に後りなりし呉係主が中
後り紀くの高麗館は未備するは御にて居ける
なるを我よく未だり幸ひなるは光州府にあれども我
より出逆すはくも業文けんなりすくやうなるべし呉係

友だちの曰く彼方に行き給ふの者也
ふくさを結ばうとて孔平原に暫く此義を言西
徐州より云へ光州府へ送らふして後り行く一大事
は後ひろめを途中にあやまちありてはやぶれ彼を
ひきひらやらんと思ふ孔平原友だちの曰く僕此物
ん雅樂を撰くるふと云ふ孔平原大いに歎びて
先生を使者に差へ云ふ云ふ知れども御教さん是
一方の秘密は是ふ故止まりと言葉をつくしふ
信友だちの為に此方をつくして是を為をつくす
此書は物ふ殺日を経ずして光州府に着し物ち

言葉に対面し密を深く孔平原に対面のつ
んと言葉を強りて言葉を為れ知れ
信友だちの別を告て物りしが此事知るもけさふ
うける

俳諧曰

雖乾ふて喧嘩喧王　麻糸抜児
清朝は不改を憤り教義は無を為し
玉　支丹宗古法の三教を攻撃し邪仏を
破るべし南宗禁教ふ八条元禁
天徳王と称し此姓養は儒をめぐる

拒ふ英吉利ふ京はせたのくふ藤くく敗そ
の軍敗ふ帰りて芸所口ふ攻よせしふ主白
玉りまく進安城へ来りイキリス先勢ある
都督慶喜徳川後藤の都智薩覇尼
さきの当をそくく奇郷を以て生捕紀解を
是くて論くりれど英吉利の諸将を男徳
感じ屈伏して味方まる故又東京宗所ふる
山西汾別の劉瑋同澤別の曹寛
当勇将といへども是又李白玉ぐ偽無宗
物やすさ是ちくくしき戦ひも世民本山

西くとる趙元京ふ寧西府ふて後伏紀玉
と戦ふ附傷利ふとりへども法武就ふ傑
異をおそ出きく英吉利勢敗ふくると
当て大ひふ警を一ト先家を引退き後日
小京より討ものの加ふとき出戦をまけん
と是も和国使別へくりる依て朱元嘩
哨吸を哨ふ銅日の警るぐ鞆鞆の宏
くく前後より勇威を高くひ後ふ食体
い鞆鞆情敗記ふ見へたり拍程全

付録の一段と雑組格記とハ同時のくくひ
ゆて英吹刊物南京の第元帥の天津エ
しゅりんようにくくりしハ拙全の付
録の後ありるべし　名主の陵湯を隔てし
外国此有さるあるふ考えハ格しく前後ある
此段誤録知りそふべし

外邦古事記巻之三終